

# 佐伯鶴城新聞

since 1911

第13号

編集所 立城校部  
分伯鶴字部  
大佐高等  
新聞

編集責任者 若春小  
工藤

## 今年は気合いが違う 準備も万端・鶴城祭文化の部

準備も本格的に始まり、鶴城祭文化の部もいよいよ近づいたと感じる。その準備を中心と取り取り仕切っている三人に、今年度の文化の部への意気込みを聞いた。

文化委員長の中元美来さん(二二)は「例年に比べ、パフォーマンスを披露してくれる出場者が多い。校長先生をはじめ、企画・運営をしている役員の気合いも十分。全員で協力して、

皆さんの思い出に必ず残るものにする」と話してくれた。

文化の部実行委員長の小野祐樹さん(二二)は力を入れてることについて「モザイク壁画の出来上がり、より良いものになるよう、現在調整を行っている」と語る。

生徒会長の福嶋里美さん(二二五)は「今年度の文化の部は第40回を数える。そこで、予算やイベントに

鶴城祭文化の部の準備が着々と進んでいる。今回は、それを取り仕切っている文化委員長・文化祭実行委員長・生徒会長の福嶋さんは「せめてこの2日間だけは辛いことをすべて忘れて楽しんでほしい」と呼びかける。



福嶋会長(右)と川野実行委員長(左)

モザイク壁画を制作中(生徒会室)

掛ける時間も大幅に増やした。その時間をぜひ有意義に使ってもらいたい」と話す。

最後に、全校の皆さんへメッセージをもらった。

「MCと一緒に盛り上げていく。皆さん一緒に楽しみましょう」と川野さん。福嶋さんは「誰もが、勉強等辛いこともたくさんあると思う。この二日間だけはそれを忘れて、心から楽しんでもらいたい」と呼びかけた。

(記事・野村 香菜)

### 合縁奇縁 第5回

今回紹介するのは、私たちの学校生活を支えてくださっている、事務長の田中陽一先生である。先生には、学生時代の思い出の品であるフォークギターを持ってきていただいた。

【趣味】タグラグビートのコーチとして、小学生に楽しさを広めること。嫌いな物はない。

### 人生を振り返る曲は

【ビートルズ】『イン・マイ・ライフ』

【宝物】もちろん家族。【いま望んでいること】活気あふれる佐伯市に戻ること。

【休日】の過ごし方【タグラグビー】の練習や試合に行く。たまに、息子と釣りもする。

【学生時代の思い出】バンドを組み、ギターを弾いていたこと。ビートルズがお手本。

【ビートルズのどんな曲を手本にしたのか】フオークギターを用いる、静かなタイプの曲。

【憧れの人】ビートルズのジョン・レノン。

【好きな曲】『イン・マイ・ライフ』。自分の人生を振り返れるような歌詞だから。

【ビートルズはいつから好きなのか】小学校五年生の頃、TVで見

【今年の「文化の部」に望むこと】クラス展示では、TV等の真似ではなく、「これぞ、鶴城生」といったオリジナルの企画を楽しみにしている。

(記事・佐藤 千晶)



思い出のギターを奏でる

### 東京国体 本県らしい試合を

#### 体操・水泳が会場

第六十八回となる東京国体が九月二十八日から十月八日まで行われる。その大会

岩佐さんは「予選を通過できて良かった。でも、出場して終わりではない。前回の大会よりも技の質を上げ、良い雰囲気で行きたい。前回の反省すべき点を修正していきたい」と話してくれた。

林さんは「前回の大会で自分たちの演技の悪いところが分かった。国体にはそこを修正して挑み、一つ上のレベルの演技をしたい。また、けがには十分気を付け、大分県らしい試合をして来たい」と話した。

濱田さんは「国体に出場できると聞いてとても嬉しかった。本県の代表として出場するので、いつも以上に気を引き締めていきたい。決勝に残って皆を驚かせる」と語った。

(記事・松下 秀之)



前回の反省を活かす(体操)



いつも以上に気を引き締める(水泳)

鶴城祭文化の部が間に迫り、校内も慌ただしくなっている。5分短縮授業となり、放課後の1時間はクラス作品展示の準備に当てられている。今回は、40回記念祭。例年よりも、発表や展示等を長い時間楽しめる日程となっている▼そこで求められるのは、作品のオリジナリティ。しかし、それを叶えることは容易なことではない。準備もなかなか思い通りに行かない。制作に掛けられる時間も短い上、部活生は1時間後、教室を去り練習に向かう。部活生を問わず、全校挙げて時間を大切に使うことが要求される時期▼そんな折、つくづくありがたいと思うのは、信頼できる仲間が存在。仲間の声に耳を傾け、一緒に作り上げるという意識が信頼を育てる▼よくこんな場面に遭遇する。一旦受け持った決まった仕事を、「得意ではないから」と他の人に押し付け、投げ出してしまふ。それでは、仲間を不快にさせるだけ。信頼が育つどころか、生まれもしない▼確かに、クオリティの高い作品を作ることは、とても素晴らしい目標である。では、それ以上に大切なことはないのか▼全員が最後まで投げ出さず、一緒に作り上げたという事実。作品作りを通して、仲間と協力する難しさや相手を信頼し、信頼することの大切さを学ぶことができる。今がそんないい機会である。

### 触角

鶴城祭文化の部が間に迫り、校内も慌ただしくなっている。5分短縮授業となり、放課後の1時間はクラス作品展示の準備に当てられている。今回は、40回記念祭。例年よりも、発表や展示等を長い時間楽しめる日程となっている▼そこで求められるのは、作品のオリジナリティ。しかし、それを叶えることは容易なことではない。準備もなかなか思い通りに行かない。制作に掛けられる時間も短い上、部活生は1時間後、教室を去り練習に向かう。部活生を問わず、全校挙げて時間を大切に使うことが要求される時期▼そんな折、つくづくありがたいと思うのは、信頼できる仲間が存在。仲間の声に耳を傾け、一緒に作り上げるという意識が信頼を育てる▼よくこんな場面に遭遇する。一旦受け持った決まった仕事を、「得意ではないから」と他の人に押し付け、投げ出してしまふ。それでは、仲間を不快にさせるだけ。信頼が育つどころか、生まれもしない▼確かに、クオリティの高い作品を作ることは、とても素晴らしい目標である。では、それ以上に大切なことはないのか▼全員が最後まで投げ出さず、一緒に作り上げたという事実。作品作りを通して、仲間と協力する難しさや相手を信頼し、信頼することの大切さを学ぶことができる。今がそんないい機会である。